
【特集】東西冷戦下の社会主義ドイツ——政治、経済、社会

特集にあたって

進藤 理香子

かつて米ソの対立を頂点に世界を二分した東西冷戦が終焉を迎える。1990年10月に東西ドイツの再統一が実現してから、今年ではや35年目を迎える。このとき消滅した社会主義ドイツ（東ドイツ）は、第二次世界大戦後、鉄のカーテンで分かたれた東西陣営の最前線として、ソ連軍占領下から1949年10月に建国された。この意味において、東ドイツは、まさに東西冷戦の申し子であった。あと数年もすれば、東ドイツが存続した41年間という生涯と同じだけの年月が過ぎ去ろうとしている。

20世紀から21世紀の過渡期という、目まぐるしい世界規模の変化のなかにあって、失われた東ドイツ社会について回顧し、史学的に再考することは決して無駄なことではないだろう。かつて社会主義陣営から敵対視された、資本主義・自由主義陣営に生きる現代のわたしたちの社会もまた、完璧には程遠く、多くの欠陥を伴っている。東ドイツの人びとがあこがれ夢見た西の生活は、倒産や失業というネガティブな現実と表裏一体であることを、統一後の大不況のなかで、かれらもまた知ったのであった。おそらくは、東ドイツの経験とその終焉から、現代の日本に生きるわたしたちも、なお大いに学ぶところがあるだろう。そのような思いから、本特集では、東ドイツの政治、経済、社会、学術、文化のそれぞれの分野において、回顧と史学的検証を試みるものである。

そもそも東ドイツ研究は、東西冷戦時代に西ドイツによる社会主義批判の観点から開始されたものであった⁽¹⁾。統一直後の1990年代初めには、そういった西側の論調の系譜に立ちつつ、ドイツにおける二つの独裁であるナチス・ドイツと東ドイツ、という批判的スローガンのもとで、ドイツ社会主義統一党の独裁の解明が、新生ドイツの国家的事業の一つとして取り組まれた⁽²⁾。この方式では、国家保安省による監視や盗聴といった人権侵害、言論や移動の自由の制限などの問題が偏重して取り扱われたために、東ドイツという社会が、一方での支配する側と、他方での弾圧の犠牲者という具合に、単純な二項対立と勸善懲悪の世界観において断罪されるものとなつた⁽³⁾。このような初期の解明作業は、多くの成果と同様にして、同じくらい多くの問題を引き起こした。というのも、ベルリンの壁崩壊という大事件の興奮が冷めるにつれ、かつての東ドイツ市民のなかにも、支

(1) 河合信晴「東ドイツ研究の現在」川越修・河合信晴編著『歴史としての社会主義——東ドイツの経験』ナカニシヤ出版、2016年、12-28頁。

(2) Bundesstiftung zur Aufarbeitung der SED-Diktatur（ドイツ社会主義統一党独裁の解明へ向けた連邦財団）ホームページURL：<https://www.bundesstiftung-aufarbeitung.de/de/start>

(3) ドイツ連邦議会公聴会「ドイツ社会主義統一党独裁の歴史と結果に関する解明（Enquete-Kommission „Aufarbeitung von Geschichte und Folgen der SED-Diktatur“）」1992年3月。

配と従属のどちらの側ともいえないグレーゾーンの問題や、いわゆる普通の人びとの立場が議論されないこと、あるいは家族の思い出と結びつく東ドイツでの生活様式を含めたその全てを社会主义の悪とみなして、ドイツの第二級市民としてレッテルづけすることに対するいら立ちが見られるようになつた。こうした矛盾を反映しつつ、東ドイツ研究の方向性も、この30年の間に次第に個人的経験や社会史的手法を取り入れつつ、より多様な姿へと変化してきている。このような研究史上のながれを踏まえつつ、本特集では、改めて東ドイツの過去と取り組むものである。

第一論文、河合信晴による「国民戦線とドイツ統一問題（1953～1955）——「ソ連覚書提案」以降における東ドイツ住民のドイツ統一意識」では、1950年代前半、統一か分断化かというドイツ問題の処理をめぐり、連合国側に未だある種の流動性が見られた時期に、そもそも東ドイツの市民自体は自分たちの国のあり方について、どのように考えていたのであろうかという問題を、連合国間交渉の経過との関わりのなかで検証した研究である。東ドイツの諸政党・大衆組織を統括し、社会の末端まで包摂した官製組織のドイツ国民戦線、この組織の裏の任務であった、国民の世論動向調査の記録をもとに、地道な一次資料考証によって浮彫にされた東ドイツの人びとの生の声は、今日の私たちが想像するような、言論の自由のない制約された社会という定式を覆させるに十分な、冷戦下の東ドイツの日常の新たな一面を提示している。

第二論文である、白川欽哉による「東ドイツ社会主义工業化にまつわる三つのエピソード——社会主义の夢と現実：アイゼンヒュッテンシュタットの事例から」では、東ドイツ建国直後に、国家的事業の一つとして、製鉄業を中心にドイツ初の社会主义的産業都市として建設されたアイゼンヒュッテンシュタット（旧スターリンシュタット）について、建設着工に至るまでのソ連・東ドイツ間の政治交渉と計画都市建設の実際について詳細な研究を与えている。とりわけ興味深いのは、戦前、この町が小さな地方都市フルステンベルクであったナチス・ドイツの時代に、この地に捕虜収容所が存在し、ソ連人やポーランド人の戦争捕虜たちが強制労働に従事させられ、多くの死者を出したという忌まわしい過去について、東ドイツとソ連当局が一般には隠蔽し続けたうえで、労働者の福利厚生までを考慮に入れた模範的な社会主义的近代都市の建設を進めたという指摘であろう。

第三論文である、フランク・リースナーによる「矛盾に満ちた国への回顧——社会主义ドイツに生きた生活者の視点から」（齋藤正樹訳）では、現在のザクセン・アンハルト州の町であるゲンティーンで生まれ育ったリースナー氏自身の個人的体験をもとに、多くのウイットを含みながらも批判的な目で、東ドイツ社会の矛盾について回顧した作品である。氏は1989年11月に起きたベルリンの壁崩壊時点で24歳であり、東ドイツ国家人民軍での兵役も終え、統一の年の1990年には、東ドイツのマグデブルク工科大学を卒業した。その体験から得られた東ドイツ社会の実相から見えることは、当時、大半の市民が、政治的賛同からではなく、まったく実生活上の便宜的理由から、支配政党であったドイツ社会主义統一党とどうにか折り合いをつけて生活していたという点であろう。

第四論文の進藤理香子による「ドイツ社会主义統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所と日本人——向坂逸郎と社会主义協会による1965年のソ連・東ドイツ訪問から」では、一転して、考察の目を東西冷戦下の日本と東ドイツに向け、東西陣営の垣根を越えた交流の意図について

て、主にドイツ社会主義統一党中央委員会文書の一次資料考証から検討するものである。1960年代の半ば、日本と東ドイツ間にいまだ国交が樹立されていなかった時代に、東ベルリンのマルクス・レーニン主義研究所が社会主義協会と学術交流に関する合意を結んだことは、単なる学問の域を超えた双方の繋がりの始まりを意味するものであり、東ドイツ側の対日政策の一端を知るうえで貴重な事実である。

以上、本特集での概観を述べたが、最後に、リースナー論文の翻訳を担当された齋藤正樹氏の御助力に心より御礼申し上げる。また、本企画は、科学研究費基盤研究C（20K01579）からの助成を受けたことも合わせて報告し、謝辞と共に、この巻頭言を締めくくりたい。

（しんどう・りかこ 法政大学経済学部教授）